ドンパン楽団
（筋ジストロフイ少年グループ）

忘れえぬコンサート　　柳川　智幸（17）

10月18日の朝日講堂でのコンサートは、ぼくたちにとって忘れられない思い出になりました。ぼくたちの楽団が講堂で、たくさんの人を集めてコンサートをすることができるとは、思いもしませんでした。このコンサートの話を初めて聞いた時、ぼくたちにそんなことが本当にできるのだろうがと不安な気持ちにさえなりました。でも、今はコンサートをやりとげた満足感でいっぱいです。あのコンサートで一番印象的だったのは、ぼくたちの演奏が終った時のことです。花束を渡され、みなさんが暖かな拍手をしてくれた時、しみじみと楽団をやっていてよかったと思いました。うまい演奏をすることはできませんでした。でも、晴れの舞台に立てただけで幸せです。いつも家に居るぼくにとって、一生残る楽しい思い出になると思います。こんなに立派なコンサートができたのも、ぼくたちの練習を直接指導してくださった赤星先生、演奏のバックアップをしてくださった音楽家の人たち、そしていつもぼくたちを支えてくれているボランティアの人たちのおかげです。どうもありがとうございました。

今度のコンサートで、ぼくたちはさまざまなことを教えられました。努力の大切さ、一生けんめいやることの大切さを。生きていることの楽しさを。そしてぼくたちを暖かな善意で包んでくれる人たちの多いことを。このコンサートの思い出は、きっとぼくたちの「生きていく支え」になると思います。今度のコンサートの経験を生かして、これからもみんなではげましあいながらよい演奏を目ざして楽団の活動を続けていきたいと思います。

宮崎　敬二（17）

10月18日　雨　朝日講堂に行く。テレビに出る。得意な気持ちで僕はバスに乗った。そして少し緊張した手で楽器に向かう。おもうように手が動かないけど、音の中に、自分がここにいる事を嬉しく思った。

10月19日　茶の間のテレビは僕と向かいあって動かない。僕の友達だ。僕がうつる6時一家族が集まってテレビを黙ってくいいるように見る。僕は胸が熱くなって、目の前がかすんでくる。こんな姿を全国のみなさんに知られていやだ。"やっぱりいやだ！"訳のわからない涙がこみあげてくる。

10月22日　僕は今1人で、この作文を書いている。何のためにテレビに出たのかを……。そして僕の流した涙は、自分だけのからの中の涙なんだと。

同じ苦しみを、同じ夢が――これを計画してくれた人達にもあるのだと信じ、明日のために、又がんばろうと思う。

関係者のみなさん、ありがとうございました。

善意にみちみちた身障者コンサート
じゃんけんぽんをもういちど

S．50．10．18　於朝日講堂

四ツ葉会
（横浜訓盲院OB）

音楽とは　　飯田　洋二

何年か前プロミュージシャンになろうと赤星先生の事務所を訪ねた。その時の僕はアルトサックスを吹いてジャズがやりたくて、先生に相談すれば何とかなるのではないかと考えたのです。先生は、「日本の現状ではジャズで生計をたてることは常人でもむずかしいし、他のメンバーとのコンビネーションもあり1人でやれる電子オルガンをやった方がいいのではないか……」と教えてくれました。それから電子オルガンを修得し、それを職業としましたが、色々なネックがあり、現在は音楽を教えながらマッサージをしている……という現況です。

そんな先生に久し振りにお会い出来て本当に嬉しかったのです。コンサートの方は上手下手は別にして、それぞれ特色のある演奏に感激するシーンが数々加わり、自分というものを見つめ直すと同時に、音楽に対する態度をジックリ考え直しています。

コンサートを終って　　神崎　勲雄

初めコンサート出演の話があったとき、メンバーが揃わないのと、コンサートの翌日が子供の結婚式なので正直云って気のりしませんでした。然しコンサートに参加して、それぞれ身体に欠陥のある同志が集ってこれだけのコンサートが出来た……ということに非常に満足しています。

このコンサートは他のものには感じられない全く感激的なもので、これに参加出来た事は重ね重ね幸福な事と思います。

又あとテレビで野村君の"ぼくのゆび"という唄を聞いて、あの時の感激をひとしおこくしました。

ザ・イレバーズ
聖明園老音楽団

特別養護老人ホーム富士見園長　**本間麻子**

先日私共の施設〝富士見園〟の寝たきりの方々が、不自由な手を動かして　ザ・イレバーズのバラが咲いたに寄せて、私達にもお礼の真似ごとでも出来ればと、バラの造花を一生懸命作りました。

小さな事でしたが浜口、赤星両先生が大変喜ばれた由、早速お年寄の方々に報告しましたところ、今迄の年輪を重ねた顔のしわを、なおいっぱいにして涙をこぼす人、言葉の出ない人Etc……とても喜んで、又1つ生甲斐が増えたと申す姿に私共職員も目がしらのうるむのを覚えました。

あの唄のように、庭のバラは散りますが、私たちの心のバラはいつまでも咲いています。

園長　**本間　昭夫**

音楽に国境はない。音楽に差別はない。音楽を通して障害者と聴衆、そしてこの演奏会を企画されたＦＭＡ、又その趣旨に賛同した方々、多くのボランティアなどが一体となった会場は、まさに心と心のふれあい、温かいムード、愛情に満ち溢れていました。

最近こんなに心をなごませてくれたものはありませんでした。あの日会場に来たすべての人が同じ思いであった事と信じています。

障害者のために音楽を通じて、くじけず、強く明るく生きよと祈っていた主催者の意図は、今日のこの成果で更に自信を深め、次の飛躍につながる事を信じています。

バンドリーダー　**田中　まつよ**（83）

10月18日はイレバーズにとっても、私にとっても忘れる事の出来ない大切な日でした。なんとなれば、今をときめく浜口先生が私達の伴奏で唄を歌って下さったのです。

リューマチのため、右手は親指と人差指の2本しか使えず、時にはこの2本さえ思うように動かず、琴のつめを親指にはめて演奏しなければならない状態の私が、心配していた事もなく演奏出来、この指がまだ大丈夫使えると自信をもつ事が出来ました。

〝バラが咲いた〟という曲、まっ赤なバラ小さなバラを、今後も大切に心の中にきざみつけた。本当に有意義な1日でした。

生活指導員　**西田　紀代**

秋晴れを期待しておりましたのに生憎の雨朝日講堂でのコンサートの出演は、お年寄や私達にとって大変勉強になりました。

朝日新聞の玄関についたとたん、若いボランティアの方々が飛び出して下さり、雨の中を楽器を下したり、老人を誘動して下さったり、善意に満々ちたコンサートでした。

幼くして病におかされた子供達の一生懸命演奏している姿に頭が下ると共に、私達のイレバーズも前向の姿勢で演奏し、会場に行けず留守番役をしていた老人達もあとでテープを聞いて大変な感激でした。

色々な障害をのりきり、雑草のように自分達の生きる道を音楽にぶつけている姿を目の前にして浜口先生の〝バラが咲いた〟のようにいつまでも散らない真赤な心のバラが、舞台　会場をとわず咲き乱れたのを感じました。今後もこの様な善意の輪を広げてほしいと思います。

山内正夫
筋ジストロフィドラマー

去る10月18日に、東京有楽町の朝日講堂に於いて、僕たち身障者のポピュラーコンサート〝ジャンケンポンをもう一度〟がＦＭＡの主催で盛大に開かれました。今回のこの演奏会には府中のドンパン楽団や聖明園老盲者のザ・イレバーズ、四ツ葉会、それから僕のドラム演奏などが中心になり、3時間にわたってくり拡げられました。この演奏会には、朝日新聞東京厚生文化事業団やＮＨＫ厚生文化事業団の後援など、大きな善意の暖たかい手が差しのべられ、盛大なコンサートになりました。

当日は朝から、あいにく雨が降っていましたが、会場の方は暖房と熱気で暑すぎる程でした。僕が会場に着いたのは、開演40分前ぐらいでしたので、リハーサルの間もなく、ドラムのセッティングで、せいいっぱいでした。

この日は、赤星先生が僕のために、日本一のドラムの先生、ジミー竹内さんとの共演を用意して下さったんです。ジミー竹内さんは僕にとっては、ドラムの神様に思えるような存在の方です。僕が出る頃は3時を廻わっていました。僕は、始め2曲ぐらいの演奏だと思っていましたが、時間の都合で予定していなかった曲までやる事になってしまいました。曲目は、サウンド・オブ・サイレンス、愛の休日、青い影、ヘイジュード、夜明けの唄と5曲をやりました。普段自分のレコードでは出来ても、歌手が入らなかったり、メロディーや伴奏が3人ぐらいになると、どうも勝手が違うのか、自分のいつもの実力の半分も出来ず、曲の始めや終りなどがなんとなくしまりがなく、自分としては50点ぐらいの出来でした。でも一緒にやってくれた人達とは、当日会場で始めて逢い、リハーサルもなく、ぶっつけ本番でしたので無理もありません。僕の演奏中、ジミー先生は僕に気をつかって下さり、後ずっと支さえていて下さいました。そして1曲終るごとに、先生はドラムのセッティングの調整をして下さったり、リズムの速さや、カウントを数えて下さったり、終始心配して見守って下さいました。最後にジミー先生と2人でドラムソロの共演をしました。そしてジミー先生は僕のために、汗だくになるまでドラムソロをやってくれました。力の入った先生のシンバルの一打一打の音は深く僕は胸に刻み込まれ、これからの僕の心の支えにしていこうと決心をしました。

僕は今迄、テレビやステージを何回かやって来ましたが、これ程感動的なステージはありませんでした。それは、音楽によって生きてゆくための勇気と生き甲斐を知ることが出来たからです。どんなに下手でも、不自由な身体でも、人前でプレイすることは、本当に楽しいことです。僕たちは、これを機会に今まで以上にもっともっと強く、明るく、積極的に生きてゆくことが出来ると思います。

ＦＭＡスタッフの皆さん、赤星先生、ジミー竹内先生、浜口庫之助先生、本当にどうもありがとう。できれば来年もまたこの様な僕たちだけのコンサートを開いて下さいます様にお願いします。